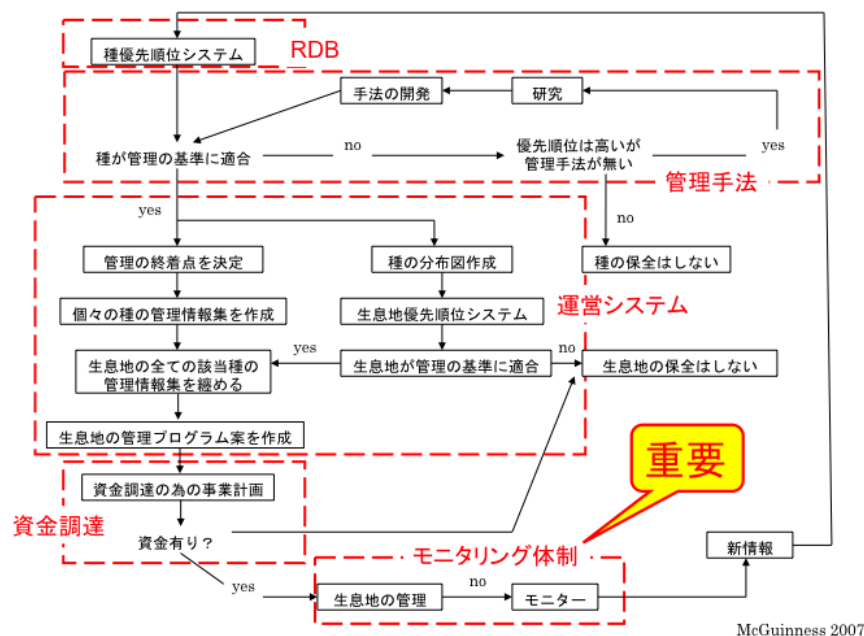


赤城山におけるヒメギフチョウ産卵数のモニタリング

赤城姫を愛する集まり 松村行栄

ヒメギフチョウは現在、関東地方では唯一、赤城山だけに生息している。近年、数の減少が著しく1986年に群馬県の天然記念物に種指定された。

ここでは赤城山におけるヒメギフチョウの産卵数について、20年間のモニタリング結果を報告する。生物の保全計画を策定するには、その生物種の生息状況を継続的に監視することが重要である。



生物の保全例

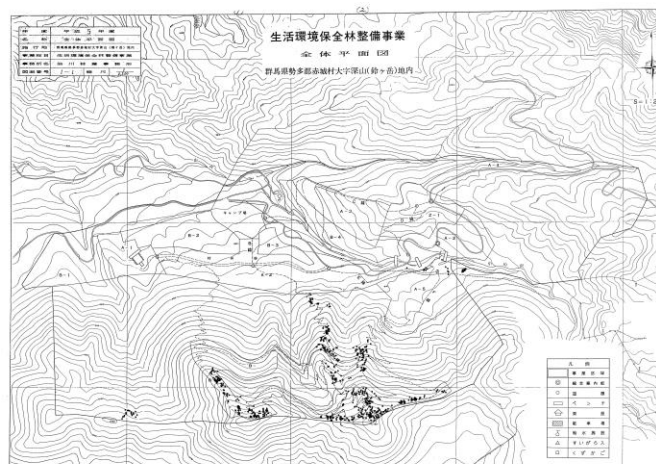
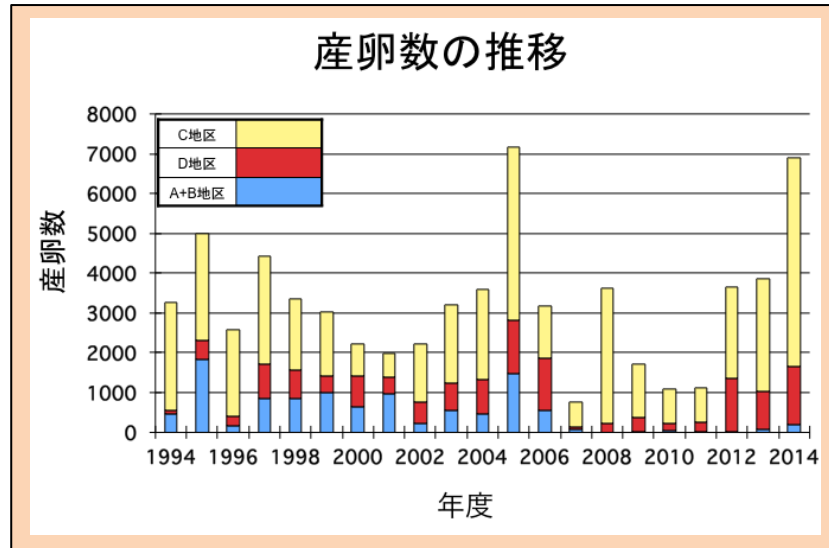
調査場所および方法

赤城山西面の鈴ヶ岳に繋がる尾根筋で、標高 900-1200m の約 70ha の地域。産卵は地域内の 3 つのピーク (A+B 地区、C 地区、D 地区) 周辺で行われ、赤城山におけるヒメギフチョウの全生息域がこの地域に含まれる。

調査ではヒメギフチョウ生息域内にある全ウスバサイシンを対照として卵塊を確認した。確認された卵塊は確認場所を地図上にプロットし、卵塊内の卵数を記録した。以下のデータは3地区で確認された卵の総数を年度毎に集計したものである。ることが重要である。

結果および考察

産卵数は1000～7000卵で、約10年周期で変動する(成虫数として30～210を推定)
産卵はA+B地区からC地区に移動し、現在はC地区がメインランドになっている
近年は1000卵を下回ることもある⇒補強を実施する目安とする



2013年の産卵ポイント

生物の保全を実施する場合、保全種の選定、衰退原因の調査、保全計画の策定・実施が重要である。しかし、保全計画は普遍のものではなく、保全種の生息状況を確認しながら修正する必要がある。その修正の根拠となるのがモニタリングの結果である。

赤城山のヒメギフチョウにおいては、今回報告したモニタリングの結果を補強等のさらなる保全対策実施の判断根拠として利用している。その際、より正確な判断をするには、できるだけ長期間に渡るモニタリングデータが必須である。